

## 鷺見文庫書誌覚書(中) : 廉斎書留より(3)

白石, 良夫

<https://doi.org/10.15017/4742034>

---

出版情報 : 雅俗. 14, pp.84-96, 2015-07-17. 雅俗の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 鷲見文庫書誌覚書（中）

— 廉斎書留より（三）

白石 良夫

## ⑲伊福部姓系 「国文・5・104」

大本、写本、一冊。外題（題簽）「伊福部姓系 因幡国府国□系 全」。内題「因幡国伊福部臣古志并序」、その下「散位従六位下伊福部臣富成撰」。卷末識語、

享保八年四月十六日書之（花押）

天保四年一月三日付信友宛安歎書簡に、該書探索の記事あり。

## ⑳玉勝間まなびのことぐさ 「国文・5・53」

大本、写本、二冊。題簽に「玉勝間まなびのことぐさ 二冊の内」とある。伴信友による『玉勝間』からの抜粋。序文、

此ふみは はやく鈴屋大人のこゝろをのべのすさびにとてつみた  
められつる玉かつまの中に まなびのかたにむねとあるをちく  
につましるしおきて 常に來かよふわか人にあつらへて まなび  
がてらぬきいでて書うつさせたるなり かくてとしごろかたはら  
はなたずかへさびよみあぢはふるに ふる野の道のかくれなく見  
えわたるこゝちしてたふとくおぼゆるから おのづからまなびの  
常の書くさとなむなりぬる さるほどにおなじともがらもめでよ

ろこびて これかれうつしもてゆくなかに 鷲見の安歎主許とに

めではやして かくものせるに名の無きにくちをしきや いかで

ともよほさるゝ もとより魂あひたるいさめごととよろこばして

すなはち玉かつままなびのことぐさと名づけつ

天保四年五月十三日 「源伴信友」(印)

印は信友使用の真印。安歎に進呈するための写本か。序文年記の翌日  
一四日付安歎宛信友書簡に、「玉かつま抄録、題名も序に認候てさし上  
候」とある。

## ㉑波波迦説 「国文・5・107」 伴信友著

大本、写本、一冊。外題（題簽）「波波迦説 伴翁稿 全」。「ははか」  
（桜の一種）の考証。識語、

波々迦説伴信友翁所著也 許借稿本使臣与四郎写之 他日俟脱稿

天保十年正月 鷲見安歎

## ㉒日本文徳天皇実録 「国文・5・4」

大本、刊本、一〇冊。外題「文徳実録 校訂」。奥付は真ん中に「冑宝

永六丑季春吉辰／御書物屋出雲寺和泉掾」とあって、その左に「天明八申歳焼失／寛政八辰歳校訂新彫」とある。

朱書入れあり。その識語（巻一〇尾題の右の余白）、右十卷連々以五異本校合之亦一本亦白雲軒本

文化十二乙亥年正月廿一日於平安官舎 伴信友

古写本奥書 延文元丙申年六月日修補之 正四位下行神祇卜部兼豊以一貴庫御本批校写標ヒ

以日本紀略校之 類聚国史同之 信友又記

卷一〇、裏表紙の貼り紙あり。

余サキニ校スル処如右 頃日遠ク鷺見某ノ託ヲ受テ購ニ刊本一人ニ課テ校字及証文等ヲ写サセントシテ即求ニ刊本ニ 前板天明ノ大災ニ遭タル由ニテ 寛政八年校訂新刊本ヲ得 ハジメテコレヲ見テ校スルニ十ガ九ミナ余ガ既ニ校スル処ト同ジ 予ガ校字ノホカニ出ルモノ一字モアルコトナシ 故写手ニ敢テ斟酌シ書写セシム 但校字出ル処ノ本 其標一々挙ルニ堪ヘズ オノヅカラ詳略アレドモ 一字モ意改ヲ用ヒタルコトハアラズ 同一校シテ追之 然レドモ老來氣力ノ乏キヲ覚フ 猶誤字アラバ余ガ罪也  
天保十年三月十八日 伴信友

②9美濃家つと折添 「国文・5・25」 本居宣長著

大本、写本、三冊。朱の書入れ（飯田秀雄）多し。

上冊の朱識語、

天保九年四月十一日上巻書をへぬ

飯田秀雄朱書入

中冊の朱識語、

天保九年四月十八日中巻書をへたる拔萃也  
下冊の朱識語、

天保九年四月 風にあたりて心地そこなひをり おのれによりて歌よまむとする輩に戯れて見せつる也

さばかりの色はなくともをりそへし花の為には風もいとほじ

廿一日の夜書をへぬ 見合すべき書もなくてそらに書つけたるなれば 誤れらんこと十が七八なるべし 楠斎秀雄

天保十亥年春朱書入畢

③0日本書紀 「国文・5・3」

大本、刊本、一五冊。慶長四年清原国賢の跋文を付す。刊記「寛文九己酉年正月吉辰／武村市兵衛昌常・村上勘兵衛元信・山本平左衛門常知・八尾甚四郎友春」あり。朱書入れ・塗抹多し。

第一冊の表紙見返しに、永和本の訓点例と片仮名の古体例を示して、左の識語（朱）あり、

永本 朱ニテ乎古点ノゴトキモノヲ付タリ 今初丁一章ヲ写ス  
要ナケレバ余ハ略ケリ 伴信友校考稿

第一冊巻頭、遊紙オモテに貼り紙、

日本書紀十五冊 以伴信友之校本書入畢 自天保九年迄十年春  
米原豊秋 小林大茂在江戸之邸 此兩人以筆旁云 天保十年四月

鷺見安歎識

巻二の巻末遊紙および裏表紙ウラに、諸本の奥書および考証、

右神代紀校合次第継之記左

伴信友（花押）

●山田本云 元和二十一朱墨点了 ……（中略）…

●一古写本奥書云

本云 遂一覽之処家点无違失 可謂証本矣 勿令窓外漏之而已

入道三位雪庵道白在判

慶長第二丁酉歲舍季夏望日 三善宮内少輔藤原盛政

(花押) 書之

●異板本奥書云

云云 享保十四年己酉臘月日 從二位清原朝臣宣通書

●延欠本奥書云 延喜四年……(中略)……

右延喜本 上卷欠テ下卷ノミ存リ 故延欠本ト云フ 粘葉次第  
紙両面 写本虫損多ク誤脱亦多シ 此本モト醜醜理性院本ナリ  
ト云ヘリ 謗訓ノ片仮字ハ新シキヤウ也 書ノ体ハ四百年以上  
ノ体也ト或人上田百樹也云ヘリ

仙石政和主類聚国史考異ニ 日本書紀延喜本京師繪神祕藏トア

ル 此本歟 シカレドモ予ガ批校セ□□□粗キニ似タリ 亦ソ

ノ転写本歟

●以類聚国史及元々集好本批授本

以□本纂疏本批校 其他諸書所引用批校之

●神代卷抄ノ本文□□□校之……(中略)……

●永本上卷ノ奥書云 永和五年己未三月廿二日書写畢 本即予本也

外宮祢宜度会神主章尚(花押)

章尚自筆本有宮司精長家 然令借用如形書写校合了

下卷奥書 上卷既以大宮司精長代々家伝之 章尚之自筆卷物而

加點朱墨也 惜哉 下卷何時代紛失矣 章尚之同類本通幾度火

災 古本上下幸存外宮作所度会集彦之家也 以彼本加點下卷朱

墨畢 延宝六年七月四日 信慶(中西カ)(花押)

右永和五年本 今標永本 又書人在祐本 今随本写之 祐本

者祐遍本也 奥書写テ上候 信友

文政五壬午年正月以信慶自筆校本対校了 用朱墨

又以寛文丁未仲秋之活字本校之 用朱墨

●仙石政和主類聚国史考異文化十二年成ニヨリテ批校之目

書紀 官本 塙本保己一所校二本 環翠軒注本 見林本

類聚国史官本四部外二五本

卷三、卷末識語(朱)、

文化四年以集解本校了

本云 永正十一年五月六日書写畢 天文八閏六六書写了

卷五、卷末識語(朱)、

文化二年十月十九日未刻写了 于時在若狭小浜□□舍 伴信友

崇神紀 文化二丑年十一月十七日初更 以橋本經亮所藏之校本校

畢 信友

卷七、卷末識語(朱)、

文化二年十月廿二日燈下

同年十二月十七日亥刻 以橋本經亮所校合之本一校了

卷九、卷末識語(朱)、

文化二年十月廿七日校了

卷一、卷末識語(朱)、

文化二年十月二十四日 信友

卷三〇、卷末識語(朱)、

校合本書 荷田東滿荷田在滿二子校訂本 僧契沖校本 賀茂季鷹

以数本所校本 谷川士清所撰通証所引異本 河村秀根所得古写本  
所載集解印本 橘経亮家本及校本 類聚国史 長曆 靈異記 古  
写一本標京本 一本京本所校 交野本 釈日本紀  
熱田本奥書云……(中略)……

文化十二乙亥年二月 伴信友校合藏之 随見聞謾加筆以朱也  
卷三〇の刊記の上空白に朱で書入れ、

経亮本奥書云

日本書紀自神代至持統三十卷 得荷田東滿荷田在滿二子考訂之書  
而校合

宝曆十年庚辰秋八月八日 藤原宇万伎

安永四年乙未 浪華にして契沖法師が手づからかうがへたゞせる  
本を得て なほかうがへあはせてしるせし也

ふづき十二日をはりぬ 橘経亮

### ③1 易考説 「国文・5・97」 伴信友著

大本、写本、一冊。外題(題簽)「易考説 伴翁著 全」。上代の卜占に  
関して問答体で論じる。本文末尾に「文化二年九月 伴信友」とあり。  
朱書入れあり。

跋文を左に掲げる。

こはやく吾友堀口直充が間に答たる趣なるを なほこ、ろえが  
てなる事のあればいかで書つけてよと請ひけるにもよほされて  
又さらに考説を加へて書て見せたりけるを 後にこれかれの学の  
友にも見せて論ひさだめさするに 皆いはれたりなどいひは云へ  
ど おのれがこ、ろにはなほ云ひおほせぬところの多かるを

りくそこ、と書加へ書改などしつゝあるほど 又れいのごとく  
人々にかたらひけるほど 誰なりけむわすれたり 年へてもかへ  
さずなりてけり されど今更に書と、のへむ事のものうくてまた  
年経にけるを 田沼善一にふとそのよしうち出たりければ 其は  
さきにおのれにも見せて おもふところあらば論ひ定めてよ  
まだかたなりなる下書なればな書写しそとはき、つ、も まこと  
はしのびに写おけり いでやとてやがてまた書うつして得させつ  
おのがものからめづらしきこ、ちせられて 又れいのこ、かしこ  
筆くはへなどしつれば いと見ぐるしくなれるのみにて なほ  
りほがなる記しぎまにておもふばかりだにいひおほせぬこ、ちせ  
れば さてありけるを善一がしひて中書せむといふにまかせたれ  
ば またかく書つらねて得させたるなり かくてよみ見れば 人  
の間に答へたるには似つかずて ことさらにもものしたる書めける  
ものとなりたるぞおもひのほかなるや

天保五年六月 信友

識語、

天保十年冬、信友翁の稿本をかり人におほせて写させ畢ぬ

驚見安歎

### ③2 官職秘鈔 「国文・5・102」 平基親著

大本、刊本、一冊(上・下巻合綴)。奥付「元禄十四辛巳曆／洛陽小林  
半兵衛開版」。

朱書入れあり、その識語、

右官職秘抄 以埴氏群書類従第七十所載本校合畢

天保十三壬寅正月十三日 広滋(花押)  
広滋は衣川長秋の養子。

③③ 土佐日記考証 「国文・5・18」 岸本由豆流著

大本、刊本、二冊。見返し「岸本由豆流著／土左日記考証／江戸書林千種房・玉山堂梓」。奥付「文化十五戊寅正月／京都書林植村藤右衛門・大坂書林泉本八兵衛・江戸書林須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛」(住所略)。藍色の墨筆書入れあり。内題下の書入れ、

此青墨ノ書入ハ此日記創見ノ説ノ要ヲ括テ書ル也 創見ハ京人香川長門介景樹著 文政六年二月十六日記畢ト板本ノ末ニ記セリ  
序安芸人頼襄山陽外史漢文 門人平正澄仮字序アリ  
天保十五年辰正月書入畢 安歎識

「門人平正澄」は高橋残夢のこと。

③④ 神社私考 「国文・5・48」 伴信友著  
大本、写本、六冊。  
卷二付言、

本居翁のいはれたる説に……(後略)……  
天保八年十二月朔日 伴信友記  
右文をと、のへ此後に書べし 夜さむにたえがたくて かへりよ  
みをだにえせず

「右文を云々」の一行は伴信友全集になし。  
剥がれた付箋多し。そのうち二枚(巻一)は『玉勝間』からの抜書き。  
それぞれの文末に、

……………辰四月安歎書入  
……………辰四月安歎書添  
とある。「辰」は天保一五年。

③⑤ 神階録 「国文・5・62」 鶴嶺戊申著

半紙本、写本、三冊。序文末「文化二年十二月廿六日 海西豊臼杵鶴嶺戊申十八歳 自序」。  
識語(第三冊裏表紙ウラ)、

藤垣内翁の蔵本をかりて写し畢  
天保十五年夏 鷺見安歎  
「藤垣内翁」は本居大平。

③⑥ 高橋氏文考注 「国文・5・95」 伴信友著

大本、写本、一冊。題簽「高橋氏文考注 伴信友翁稿 全」。内題「高橋氏文考註草稿」。序文「天保十三年三月二十日」。付箋あり。  
識語、

上京之時借伴翁蔵書  
弘化二年五月□□□ 安歎  
書簡一通あり。「長沢伴雄之在京中之書翰也 天保十三年十二月」の註記がある。

高橋氏文拝見仕辱 色々發明之事共有之 喜悅此事御座候 右御草稿拙も人手に渡し兼候に付 自写可致候故 既に三十丁余相認候処 少々風邪引続キ 乍憚膝頭に癰之如き腫物を発し 安座仕兼候に付 机三昧甚六ヶしく 依て無撓筆工え申付漸写し出来致

候 乍去不馴之筋に付誤も多く 且僕が写し……(後略)……

③7 負専考稿 「国文・5・78」 伴信友著

大本、写本、一冊。外題(題簽)「負専考稿 伴信友翁 全」。内題「負

専考稿」。和名抄に見える、「負」「刀自」訛化説に関する考証。

(安歌の書入れあり。識語(裏表紙ウラ)、

此一冊伴信友翁の考也 弘化二年七月写畢 鷺見安歌

③8 仮字本末 「国文・5・50」 伴信友著

大本、写本、四冊。

識語(裏表紙ウラ)、

仮字本末全四本 伴信友翁所著 借其稿本課人使写之 于時弘化

三年九月 鷺見安歌

③9 残校記 「国文・5・94」 伴信友著

大本、写本、一冊。外題(題簽)「残校記 全」。後南朝に関する考証。

本論末尾(三三丁オモテ)に、

文政四年三月廿九日 伴信友謹稿

とある。さらに本居大平の「附論」を付し、その末尾に、

文政七年甲申八月廿八日 本居大平

とあり。識語(裏表紙ウラ)、

弘化三丙午歳九月 借伴氏原本課人而写之

鷺見安歌(花押)

④0 験の杉 「国文・5・96」 伴信友著

大本、写本、一冊。外題(題簽)「験の杉 伴翁著 全」。山城国紀伊郡

の稲荷神社に関する考証。

識語、 験之杉一冊伴信友翁所著 借得其稿本令課人而写之焉

于時弘化丙午十月 鷺見安歌

④1 蕃神考 「国文・5・58」 伴信友著

大本、写本、一冊。外題、題簽、左肩「蕃神考 伴翁著 全」。平野祭

神に関する考証。

裏表紙ウラ識語、 伴信友翁蕃神考の稿本をかり得て人におほせて写さしむ

弘化三年午十月 鷺見安歌

④2 比古婆衣 「国文・5・51」 伴信友著

大本、四冊(巻一・巻二二刊本。巻六・巻一三写本)。刊本内題「比古婆

衣(一)の巻/伴信友稿」。巻二の跋文末「弘化四とせといふとの

霜月 伴信近しるす」。巻二の奥付「比古婆衣二編三冊近刻/弘化四丁

未年初冬新刻/発行書肆 平安菱屋正治郎」。

巻六の四三丁オモテに、考証四篇(「水脈」)「あくがれ」のあとに、

上件の考ども水脈寧きぬぐあくがれは伴信友翁の説也 日野大

納言殿の御下問日野殿 天保年頃より伝奏にて 年々江戸に下り給へり

ありけるに 天保十年亥五月かきて奉られし也とぞ 翌年便につ

けて見せ□こされしを除加などしどけなく書ちらされたる草稿本のま、



也 稿本にてとみによみとりがたき条もあれば ようせずは写誤  
なんとひしらひして 福永将貫にあとらへつけて写させし也けり

天保十一年七月写成畢ぬ 鷺見安歎識

卷六に付箋二枚あり。いずれも長沢伴雄の自筆の文を写したのもの。一には、

右自筆と見えて 原本にオシ紙シタルヲ写ス(朱)

もう一枚には、

筆者云 コハ伴雄ノ自筆ニテ オシ紙シタルヲ置ク也(朱)

と註記する。

卷六の裏表紙ウラに、

弘化三年十月 人にあとらへて写さしむ そが中に水脈よりあく

がるまでの考は さきつ年 比古婆衣につみ入れられざるほど写

しおきつるを 原本の序にしたがひて綴そへつるになむ 安歎

卷一三の本文末尾、

天保三年稿 助筆田沼善一

卷一三の裏表紙ウラ、

弘化三年春 以伴翁原本手写之畢 鷺見安歎

④③神璽三弁 「国文・5・109」 伴信友著

大本、写本、一冊、共紙表紙仮綴。外題は左肩にうちつけ書きで「神

璽三弁 再草稿」、内題「神璽三弁草稿」。

奥書、

弘化三丙午年二月十三日 草稿再訂畢

今日依大行天皇遺詔 今天皇被行踐祚儀云 偶弁三神璽之事竊有

感矣 伴信友

一枚の紙片あり。安歎より信友への質問状、

○書名ノ三弁ハ何ヲ指テ三トイヘルニヤ 鏡劍玉ノ三種ノ秘宝ニ

ハアラザルベシ 此書 踐祚ノ日ノ寿璽ト云モノト三種ノ神宝

ト共ニ神璽ト云ヘルアリテ 紛ラハシキヲ弁ジ玉ヘル主意ナレ

バ タゞ弁トノミニテハイカニ

……(以下、四項目の間)……

右奉問 安歎

識語、

弘化四丁未年正月写之畢 鷺見安歎

④④神璽三弁 「国文・5・44」 伴信友著

大本、写本、一冊。外題(題簽)「伴信友翁考稿 神璽三弁」、内題「神

璽三弁稿」。

内題下の余白に書入れ、

安歎云 翁ニ問シ答ニ 三弁ハ劍鏡ヲ璽ト申スト 玉ヲ璽ト申ス

ト 公式令ニ神璽トアルト コノ三ヲ弁ジタル也ト答ラレキ

信友の本文は前掲書よりも早い段階のものと思われるも、この余白書

入れは前掲書の質問状への答えであるう。

④⑤大刀契考 「国文・5・52」 伴信友著

大本、写本、一冊、共紙表紙仮綴。内題「大刀契考草稿」。諸文献に見

える「大刀」と「契」についての考証。

本文末尾、



弘化三年五月十九日再稿畢

識語、

弘化四年丁未歳二月に写をへぬ 草稿本加削の印を見て物すれど  
見あやまりしもあらんか 猶可訂 鷺見安歌

④⑥参宮紀行 「国文・5・57」 鷺見保明編

大本、写本、一冊、仮綴。共紙表紙中央にうちつけ書きで、「参宮紀行」とあり。保明がその母親の詠歌を編集する。外題の左右に、

此書は予がたらちね 去し延享の頃 伊勢へまふで給ひける折から  
道々にてしるし置せ給ひし草稿のうち 散りて侍けるをひろ  
ひ集て書記し侍る御歌など 御心に叶ひ侍らぬもありて後日直させ  
給ん御志なども□□れど □ま、にかひやり置給ひしなれば  
書集むるもいかゞなれど これ□御かたみとおもへば いたづら  
に□はみ捨らんも本意なき心地して み□りに書集め侍るならし  
すみ慶明百拜

と書き付ける。「慶明」は保明の別名。

④⑦ぬのけぢめ（仮題） 「国文・5・66」

横本、写本、一冊、共紙表紙仮綴。表紙中央にうちつけ書きで「草稿」とあり、左下隅に「歎」とある。発句合の草稿（「当季兼題発句合」とあり）の紙背を使用する。

表紙ウラに左の書き付けあり。

こ、にいづることどもは 畢ぬ不のぬのけぢめを 思よれるまに  
く 書いてつる也 さるは詞の玉のを 紐鏡などにつばらには

れたれば同じことなれど それだに初まなびのおのれらが心には  
かくとたしかにこ、ろうることもかたければ 学びがてらにいふな  
りけり はたぬにあづからぬことども、 かれやこれやとあはせ  
見むためにいさゝかものしつ。

完了の「ぬ」と打消しの「ぬ」に関する考証。文中の「詞の玉のを」「紐鏡」ともに宣長著述。

④⑧郭公の歌ども 「国文・5・111」 鷺見安歌詠

横本、写本、一冊、共紙表紙仮綴。表紙中央にうちつけ書き「詠草」。内題「郭公の歌ども」。その下に「安歌」とある。

見返しに付箋に朱筆で、  
スベテノ御歌キコエザルナク ト、ノハザルモナク見奉侍ルニ  
只語格乱テ声調クルシゲナルゾ多ク見エ侍ル 今ノ歌人ハコノ難  
一ツナルヨシ 師説承侍ル コノ所ニ御コ、ロツケ玉ハ、 何バ  
カリノコトモナクテ 世ニ拔群ナルヲモヨマセ玉フベキコトヨ  
ク見エ知ラレテサフラフ アナカシコヤ  
とあり。

④⑨おもひぐさ 「国文・5・47」 本居宣長著

大本、写本、一冊。外題「おもひぐさ 全」。文末に宣長の署名あり。本居宣長全集第一八巻所収。

識語（裏表紙ウラ）、

此一冊 伴信友翁の蔵本をかり人におほせて写し畢 鷺見安歌  
天保三年五月一〇日付安歌宛信友書簡に「想草、御返却被下慥落手仕

候」とある。

⑤①紹運録（群書類従）〔国文・5・61〕

大本、刊本（一部手写）、三冊。群書類従卷六〇の上中下三冊。第六〇卷下は刊本の続きから今上天皇までを写し加える。

信友説の朱書入れあり。刊本の末尾に朱で、

続録以二本校 信友

⑤②御和歌批評（仮題）〔国文・5・64〕

大本、写本、一冊、仮綴。外題（題簽後補）「和歌集 全」。題詠に批評を加える。詠者・評者ともに不明なるも、詠者は高い身分と思われる（藩主・重臣クラスか）。

さらに朱筆の批評が加えられ、こちらはその末尾に、

樟齋飯田秀雄

⑤③古詠考〔国文・5・80〕 伴信友著

大本、写本、一冊、共紙表紙仮綴。表紙中央にうちつけ書き、

風俗今様神楽歌

笏拍子

東歌 岩田志太江わをかけ山かつの木

古詠考

とあり、その左下に、

伴信友翁草稿

とある。右四部を合綴する。上代歌謡の研究。

⑤④神武紀巡幸路次弁〔国文・5・81〕 本居大平著

大本、写本、一冊、共紙表紙仮綴。外題・内題「神武紀巡幸路次弁」。内題下「本居大平考」。

本文末尾、

保成写

とある。保成は鷲見氏か。

⑤⑤さやさや草紙〔国文・5・79〕 木下幸文著

大本、写本、一冊、共紙表紙仮綴。表紙中央（うちつけ書き）「佐々夜々草紙 三 一二の巻抄出」とあり。

最終丁識語、

此ふみ論弁すべき事多かれど やうなき事也 真心といふ事所々に見えたれど 古学者流のいふ事を聞おぼえて真心といへるにて 誠の真心といふ事はしらぬめり……（中略）……かく書そへたるは 衣川大人に此書のおもむきを問まゐらせし時に答えられしことどもを又見んに聞かせてしかとてなん 安歌

裏表紙ウラ識語、

木下幸文の著 文政三年七月自序あり 同四年梓行

⑤⑥詩歌論〔国文・5・85〕 横井千秋著

大本、写本、一冊。表紙題簽に「詩歌の差別」、本文初めに「あるひとの歌と詩のけぢめまたそのおとりまさりを問けるにこたへたる書」、本文末尾に「横井千秋」とあり。

本文に続いて千秋宛宣長書簡の写しあり（版本にも刻されたもの）。

右歌と詩とのけじめ また歌の道のすぐれてめでたく候物にて  
おのづから国を治め候はむ本ともなり候べきことわりをこまかに  
御養候趣 つら／＼に見まゐらせ候に 己がかねてより思ひえて  
候趣もこれに外ならず よくもかくまで相かなひ候事と殊にめで  
たかおどろき思ひ給候 これによりてわが教をうけがひ候はむ輩  
は かならず此御書のおもむきをよく／＼わきまへ存じ候得との  
しるしに 一言かきそへて参らせ候也 あはれ 世の人のいまだ  
此けぢめをえさとり候はぬこそくちをししく候へ あなかしこ

宣長

三月十五日

横井君御許にまうす

⑤⑧ 散楽 「国文・5・90」

大本、写本、一冊、共紙表紙仮綴、墨付三丁。「本朝文粹」卷二「弁散  
楽」を抜萃する。書入れ（朱・墨）あり。  
表紙左側に、つぎのようにある。

散楽

村上帝御製問奉宿祢氏安封

伴信友翁書入

⑤⑦ 類聚三代格 「国文・5・103」

大本、写本、七冊。文永年間校合本系統。

第七冊目、裏表紙ウラに貼り紙、

右類聚三代格十二卷之内一三五七八十二合六卷 □写校合畢 余

六卷闕矣 後日得別本補之耳

安永八年己亥九月朔 本居宣長

⑤⑨ 鈴屋翁略年譜 「国文・5・116」 伴信友著

刊本、大本、一冊。「文政十二年己丑九月」の奥付年記をもち、「藤垣  
内（本居大平）藏板」とある。

付録（写、一七丁）を付す。内容は「初山踏」「玉勝間」などの抜書  
き。その文末、

この附録も ともにすりかたぎにものせんとはかられけるに 玉  
かつまのかたぎぬしのわぶるよしありてやめられたりとぞ さは  
くちをしきこ、ちのせらるれば さらに書と、のへて 此すりま  
きのおくにとちそへおこなむ 「源伴信友」（印）

⑤⑩ 四十八番歌合 「国文・5・27」 本居宣長判

大本、写本、一冊。外題（題簽）「四十八番歌合 鈴屋夫人判」。左記の  
五篇の歌合を合写する。詳しくは「宣長判寛政元年歌合（全集未収録）  
について」（『語文研究』四七号、一九七九年六月）、「翻刻宣長判寛政  
元年歌合」（『江戸時代文学誌』一号、一九八〇年二月）を参照され  
たい。天保三年五月一〇日付安歌宛信友書簡に「翁評歌合、御返却被  
下慥落手仕候」とあるのが該書の底本か。

夥しい付箋があり、見返し付箋に以下の文あり。

此一まきを写してよとのたまはせけるま、筆をとり侍けるつい  
でに こゝろにかべることゝもを一ひら二ひらかきそへおき侍  
しを こと／＼に物せよとそ、のかし給ひけるを いなみなんも

中くゝにをこなりと ふた、び筆をわな、かし侍ぬ 翁の判せられしうへをしろしめすやうの拙なきざえもて とかくさだむべきすぢはあるべくもあらねば いかにぞや 糸ひまどへるのみなれど しか物しては詞のうへいとまぎらはしう侍れば となさばやと思へるも となすべしとかき かくあらばやとうちかたぶけるも かくあるべしなどかける所もおほからめど そはかきもあらため交てなん あたらぬはやがて墨もてけち給ひ まれに遠からぬもまじりなば 猶よさまに引直し給ひてふた、び見せ給はゞ 歌学のたよりともなりて ほいも侍べくなん あなかしこゝ人になもらし給ひそよ

付箋の主は不明なるも、右文意から該書書写者と同一人。付箋に「大茂が誤写どもにか」とあるによつて、該書の底本になつたのは小林大茂書写本と思われる。大茂は安歌と同じ鳥取藩士。

#### ○四十八番歌合

末尾に「寛政元年仲秋望開卷」とあり。計三二人が参加（詠人不知も含む）。宣長日記によれば、場所は遍照寺。

#### ○三十三番歌合

末尾に「寛政元年九月十三夜」とあり。二二人が参加。宣長日記によれば、場所は毘沙門寺。

#### ○三十六番歌合

内題下に「寛政元年十一月」とある。宣長記念館蔵の原本は一〇月とする。参加者は二四人（詠人不知も含む）。

#### ○二十七番歌合

内題下に「寛政元年十二月十七日」とあり。一六人が参加。

#### ○小坂殿十二番歌合

妙法院宮真仁法親王主催、伴蒿蹊・小沢蘆庵判の歌合（寛政一二年）に宣長がさらに判を加えたもの。日比野浩信氏「『小坂殿十二番歌合』について」（『愛知淑徳大学国語国文』二七号、二〇〇四年三月）参照。

末尾に左の識語あり。

右本居自筆の書人の本を京人にかりてうつしぬ 末ほぎ

こは妙法院宮の宮人たちによませ給ひて御みづからあはせさせ給へるを 伴蒿蹊によしあししるせよと仰ごとありて 後に小沢蘆庵にもことわらせ給ひつるを 又わが師（宣長）に 此二人の判猶心ゆかざる所あり そこが思へるやう書て見せ参れと内くゝ宮人して仰せ給へるをうけ給はりて物せられたるなり 此歌合よみ人をしるさざるは もらしけるにやあらん いかならん しらず かくて時はかの都日記のたび享和元年夏の頃 烏丸の旅居のほどの事なりけるとぞ 夏目麴麻呂

「末ほぎ」は荒木田末寿。宣長全集所収本（熊谷武至氏蔵）によれば、この識語「亥五月」すなわち享和三年の年記を持つ。

また、熊谷本は異なつた麴麻呂識語を持つ。鷺見文庫の麴麻呂識語は、文中に言う「かの都日記」が文政二年に版行されているので、それ以後に記されたと考えられる。

#### ⑥四十八番歌合 「国文・5・42」

大本、写本、一冊。外題（うちつけ書き）「鈴屋翁評四十八番歌合」。前掲書のうち「小坂殿十二番歌合」を除く四篇の歌合を収める。前掲書

をほぼ忠実に写す。これについても拙稿参照のこと。

⑥「三十首組題歌合」〔国文・5・43〕

大本、写本、一冊。共表紙仮綴。外題「三十首組題歌合」（うちつけ書き）。詠者名は冒頭の歌に「長正」とのみあり。独詠を番えた草稿か。半丁右半分に一番ごとの歌を記し、左余白に判者が判詞を書き入れる。判者不詳。

判詞のない番も多く、総評は最終丁に書き付けた判者の歌に集約される。ひともとの梢のおち葉かきつけてみぎにひだりにこき色ぞなき

⑦「姓序考・名字弁」〔国文・5・59〕

刊本『姓序考』と写本『名字弁』を合綴。付箋・書入れ多し（信友説）。刊本見返しに付箋あり。朱筆にて、

姓序考細井貞雄著江戸人 名字弁三宅公輔著京人 此両部合冊ニセリ  
書入付紙共悉伴信友ノ校本ヲ借テ 本ノマ、ニ写セル也 書入ハ  
使男保合書 付紙ハ余目書畢 天保七年冬ヨリ八年春マデノ間

とある。文中「男保合」とあるは鷺見氏。

裏表紙ウラに付箋あり。墨筆にて左のごとくあり（版本奥付の写し）。

細井貞雄著書目録

姓序考三十冊 職位考二冊 文章考一冊 神曆考一冊 大古冠服考一冊

文化十一年甲戌五月

製本所江戸山下町万屋太次右衛門

○「姓序考」

内題下署名「細井貞雄謹撰」。序文、北村久備（「文化十一年といふとしのやよひ」）・細井貞雄。奥付「詞花堂藏板／筆者浅草石川東一／彫刻東都隠士三谷堂杖斧」。

○「名字弁」

内題下署名「三宅公輔撰」。

この二書の貸借について、天保七年八月二三日付および八年六月二〇日付の安歌宛信友書簡中に言及がある。書簡文面と鷺見文庫本の現況とから、以下のような経緯が窺われる。信友は写本『姓序考』（『名字弁』を合冊）を所持しており、付箋・書入れを施していた。天保七年それを安歌に貸与し、翌八年に返却された。鷺見文庫『姓序考』は信友が京市中で購入して安歌に送ったもの（代金は請求）、合綴されている『名字弁』は信友所持写本を転写したものである。それらに信友の付箋・書入れを写したのである。

⑧「日中行事」〔国文・5・69〕 後醍醐天皇著

大本、写本、一冊、仮綴。表紙左肩にうちつけ書きにて「後醍醐天皇日中行事 禁省日中行事」。行間・頭欄などに墨筆の書入れがびっしり。さらに付箋による書入れ、その上に朱の書入れあり。

奥書・識語、

右一冊以或人本橋本前黄門筆 書写之読合畢 各不審之事可尋□

大永七年丁亥林鐘十一日

従三位藤資直在判

以或人本元禄十年七月廿二夜於燈火暫時令書写之畢

元禄十三庚辰年二月晦日書写畢

元禄十六癸未年八月廿一日写留畢

享保十三丁未終春日投筆写功畢

右の最終行の横に小字にて、

首書及傍注者□安之覚書也 今亦追而加註於首傍候也

### 次回予告—あとがきにかえて

ここ数年、視力の低下を自覚するようになって、新しい資料をゼロから読むのにも、ついつい二の足を踏むようになった。そこで、わかるところに読んだものなら確認の作業だけで済む、というわけで本稿執筆に及んだ。当初は、したがって、調査対象を三十数年前のそれ以上に拡げず、連載もこれにてとどめるつもりであった。

所詮、マイナーな地方古学者の蔵書の一部である。未知のコレクションというわけでもなさそうだし、学界垂涎の資料というわけでもない(涎を垂らすのはごくごく一握りの研究者、という意味)。国立大学の所蔵で、敷居はそれほど高くない。散逸の心配もないだろうから、わたしがここで慌てて報告する必要もなからう。取り残したものに就いては、何十年かのちに誰かが継ぐもよし、そんな奇特な御仁が現われなくとも、それもよし。と構えていたら、前稿刊行後半年もしない昨年秋、日本近世文学会で大内瑞恵氏による鷺見安歎に関する研究発表があった。さらに、地元鳥取でも鷺見氏をめぐる研究会が立ち上げられたという情報も得た。

前稿はわたしにとって滑り込みセーフの、絶妙のタイミングであったことになるのだが、大内氏はおもに東洋大学の、地元研究会はおも

に鳥取の資料を扱うようである。ならば、九大鷺見文庫書誌を完了させるのは、やはりわたしの任であろう。今を措いてはない。

それに、識語類の錯綜した年記の羅列を眺めていて、資料として使ってくればいいというだけの提示ではわたしの主体が見せられない、という思いに駆られた。信友・安歎を中心とする同時代古学者たちの動きが時系列で追えるものにしなければ意味がない、せめて、「九大鷺見文庫から見る幕末古学者の動静」とでも題した年表が必要である。その恰好をつけるためには、どうあっても鷺見文庫の全書誌をとらなければならぬ。

ということでは予定を変更し、取り残した分も含めて文庫全蔵書についての連載を続行することにした。あと数回の書誌連載をお許しねがいたい。しかるのち、前記年表を作成する。

### 〔付記〕

今回引用の安歎宛書簡は『近世歌人書簡集』第二冊(碧沖洞叢書)に、信友宛書簡は『伴信友來簡集』(大鹿久義氏編)に拠った。